

## 第一二九話

### 頼光朝臣依感夢保昌四天王等意見事

『前太平記』上 卷第十九 三九一頁から三九四頁より

#### [頼光妖鬼退治に向かう]

こうして都には、大江山妖鬼退治のお祈りのためにといて、様々な寺社に命じて様々な秘密の祈祷を行われる。そして永祚を改めて、正暦元年となされる。すぐに山陰道<sub>(老)</sub>へ官符<sub>(式)</sub>を作り申し渡し、軍隊の催促をしたが、今回の国賊は普通の

今度の朝敵尋常の者に非ず、

者ではなく、化け物の仕業ということに聞き恐れ皆催促に応じない。しかし頼光朝

変化の所為と云ふに聞き懼ちして皆催促に従はず。

臣も、「中途半端な多勢は役に立たない」と言って決して催促をなさらず、長男の

「愁なる多勢無益なり」

とて強ち催促もし給はず

下野判官源頼国、右京権大夫藤原保昌、滝口渡部綱、勘解油判官卜部季武、主馬佑酒田公時、鞍負尉碓井貞光、そのほかにも代々仕える家臣、長年最眞にした家来、

其外譜代相伝の郎従、

多年恩顧の家人

合わせて千二百騎余り、正暦元年三月二十二日、光明寺を出発して丹波国へ攻め向

かう。

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL（月下庵/<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>）をご記載いただけましたらご自由にさせていただいて結構です。※※※

[頼光夢中に神託を得る]

その日は杓子峠<sup>(貳)</sup>を素早く越えなさって、無根坂<sup>(参)</sup>をお過ぎになる時、頼光朝臣はどうしたのだろうか、急に気分が悪いように感じて、馬も進みにくくいらっ

頼光朝臣何とやらん、 俄かに心地悩ましき様に覚えて、 馬も進み難く坐しければ、

しゃったので、色々と看病して気分を落ち着かせなさったが、お気持ちは全くよく

様々にして心を取り慰め給ひけれ共、 朦気更に霽れず、

ならず、「戦場に向かう身のこのようなことこそ不思議である」と言って、権大夫

(保昌)にこうとおっしゃったところ、保昌がお聞きして、「なるほどお顔色がす

「実にも御顔の

ぐれないようにお見えになります。いつもご出陣のときは、少しご気分が悪くても

勝れず見えさせ給ひ候。 例も御出陣の時は、 少々御心地悪しきも

間違いなく(すぐに)よくなられるのに、今日の様子はどうにも理解しがたく思わ

必ず勝れ給ふに、 今日の様何にも意得難く覚え候。

れます。この場所に陣をお張りになり、一時的に御気分を力添えをしてから、ご出

此所に御陣を召され、 暫く御気を助けて後、 御進発候へ」

発してください」としっかり申し上げられたことに、「それならばどうにでも

と達て申されし程に、 「さらば左も右も」

(→分かった?)」と言って、まだ申の刻ほど(午後四時ごろ)であったが、旅宿を調べお泊まりになる。四天王を始め中心の者たちは、顔色を変えて看病する。頼光が少しうとうとと眠ったところ、夢の中に人がいて伝えてくることには、「私はこの八幡大菩薩<sup>(肆)</sup>の使いである。さて、千丈が嶽のことだが、多勢で向かうならば必ずしも勝つことはないはずだ。頼光自ら忍び入って、計略をもって鬼を討つのがよい。例の妖鬼は幻術を使い、通力を持っていると言っても、そんなにまで神の

件の妖鬼幻術を行なひ、通力を得たりと云へども、而も神靈の

威光には勝てないだろう。道中では住吉明神から先導者をおつけになるべきであ

威光に勝たじ。路次の程は住吉明神より案内者を付けらるべきなり。

る。すぐに自分から向かわれよ」と申し上げて、立ち去ると御覧になって夢は覚め

疾く疾く自ら向かはるべし

た。頼光は不思議なお思いになって、仏の不思議なお示しの内容は心の中に秘めて、ともかくも人々の意見を聞きたいと思い、すぐに藤原保昌並びに四天王の者共をこっそりお呼びになって、「私は今夢の中で不思議なお示しを受けた。お告げに従って、千丈が嶽へ多くの兵と離れ、頼光が自ら忍び込もうと思うのである。各々どうお考えになるか」とおっしゃったところ、皆さん前もって考えていないことで

各思ひ設けざる事なれば

あるので、直面して考えが及ばず、額を寄せ頭を下げたところ、渡部綱

指し当たって思慮に能はず、

額を蹙め頭を低て居たりしに、

少しの間思案し申し上げたことは、「ご命令実によいものに思われます。大江山の

「御諍誠に然るべく覚え候。 大江山の城築、

城は、その構えがしっかりしていて、普通の計略をもって攻め落とすことは、決し

其構へ固密にして、

尋常の謀を以て攻め落とさん事、

何にも

て敵うはずがない次第、たとえ敵が鉄の網を張り、剣戟を降らすといっても、貴方

叶ふまじき由、

縦敵鉄網を張り

剣戟を降らすと云へども、

の武徳を持って大江山を攻めるならば、攻め落とせないということはあるはずがな

君の武徳を以て之を攻めば、

攻め落とさずと云ふ事有るべからず。

い。それでいて潜む所の賊徒は、皆下っ端の敵であって、その上その大本は千丈が

而も籠もる所の賊徒、

皆枝葉の敵にして、

而も其本は千丈が嶽に在り。

嶽にいる。きっとあの城が落ちたと聞くならば、鬼は行方を知れないようにして他

一定彼城落ちたりと聞かば、

跡を隠して他邦に走らん。

の国に走るだろう。並びにすぐに攻めるならば、まだ我々が迫ってきていない先に

又直ぐに攻め寄せんとせば、

未だ寄せざる先に逃げ去るべし。

逃げ去るだろう。つまるところご命令のように、顛末を天運にまかせ、計略をもつ

所詮御諍の如く、

安危を天運に任せ、謀を以て忍び入り、

て忍び込み、性急にこれを潰すことには及ばないだろう」と申し上げたところ、保

急に之を拉がんには如かじ

昌が聞いて、「渡部殿の意見は、道理がかなっておいでです。しかしながら、この

「渡部殿の意見、  
理に中つて承り候。  
さりながら、

ように軍勢を率いてご出陣したのに、これから兵を送るのをやめられますならば、

斯く軍勢を率ひて御出陣ありしを、  
是より兵を止められ候はゞ、

計略が敵に漏れて必ずしも貴方の勝機はないだろう。これから下野判官（頼国）殿

謀敵に洩れて必ず御方の利無かるべし。  
是より野州判官殿を大将とし、

を大将として、諸軍勢を従わせ、大江山を囲ませ、今日左典厩 (伍)（の貴方）がお

諸軍勢を指し添へ、  
大江山を囲ましめ、  
今日左典厩御所労とて、

疲れであると言って、幸いこの場所に陣をお作りになったので、（頼光朝臣の）ご

幸い当所に御陣を召されつれば、

意向によって安心できる御家人を少し残しておいて、ご養生のために多田にお帰り

御意安からんずる御家人少々残し置かれ、  
御保養為に多田へ帰り給ふ体に見せ、

になる風に見せ、四天王の皆さん及び私保昌はこっそり左典厩（の貴方）のお供を

四天王の人々並びに保昌、  
密かに左典厩の御供して、

して、あの山に忍び寄って、機会を伺って退治することに、何の問題がありましょ

彼嶽に忍び寄って、

相計って退治せん事、

何の子細か候べき」

うか」と周りを見回し申し上げられたところ、季武、貞光、公時も、「異論に及ぶ

と眼を廻らし申されければ、

季武、貞光、公時も、

「異論にや及ぶ。

だろうか。たとえ変化自在の曲者であるからといって、日本の中にいて目に見える

縦変化自在の癖者なればとて、

日域の中に在って目に見ゆる程の者、

程度の者、どれほどのことがあるだろうか。命知らずのことも、時によっては投げ

何程の事が有るべきぞ。

暴虎馮河 (陸) も、時に取っては棄つべからず。

やるべきでない。ともかくすぐに籠に乗ってご出発しましょう」と言葉をそろえて

唯速やかに御発駕候へ」

申し上げたところ、頼光朝臣は、「私もそのように思ったのである」と言って、すぐ長男下野判官殿（頼国）をお呼び申し上げ、こっそり事情をお話しになり、

「これから諸軍を率いて大江山に向かい、四方から取り巻いて、一人も取り逃さないように計画せよ。決して、この作戦は、顔にも出さないでください」と言って、

あな賢、

此方便、

色にも出だし給ふな」

作戦を細かく言い含めて、その夜の明け方に、諸軍勢を従えて大江山へお差し向けになる。

## 【頼光大江山の妖鬼を攻む】

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL（月下庵/<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>）をご記載いただけましたらご自由にさせていただいて結構です。※※※

下野判官は一度の評議も必要なく承諾し、親子が別れて、諸軍の命を司って、すぐにご出陣になった。ようやく二十歳におなりになった若大将でいらっしやったが、名将の嫡子とあって、世間の人を聞き恐れさせた大江山の討手の大将は、少しも躊躇いなさる様子もなく、心を奮い立たせて向かわれたその顔立ちは、ああ、素

勇み進みて向かはれける其骨柄、

晴らしい大将だなあと、勇ましく思えた。その日の夕方に丹波国の国府にお着きに

天晴れ大将やと、 勇々しくぞ見へける。 其日の晩景に丹波の国府に着き給へば、

なると、その国の目代藤原保友が、四百騎余りで参上し、大將軍にお目にかかり、「保友は先導者であるので先陣の任をお与えになってください」と強く望み申し上げたことで、すぐに許しがあつたのだつた。翌日二十四日の早朝から、大江山を取り囲んで鬨の声をあげていた。元々閉じこもっている城の敵は、勢い強く勇ましい

元来籠もる所の敵、 強盛猛勇の

者共であるといつても、ごく普通のように戦の作法を知っている者でないので、攻

者共なりと云へども。 尋常の如く軍の作法知り得たる者に有らねば、

め出て戦おうともせず、ただ城中にこもっていてそれぞれの力に委ね、大石・大木

打つて出でゝ戦はんとせず、 唯城中に籠もり居て己々が力に任せ、 大木大石

を大量に投げて押しつぶそうとするだけである。それだから攻め寄せる軍勢は矢を

幾らともなく投げ懸けて、打ち拉がんとする計りなり。 されば寄せ手

射るのにちょうどいい距離だと思っても、城は高い山の頂上にあり、仲間た

矢長に思ふと雖も、

城は高山の頂に在り、

御方は

ちは谷の底にいて天地のように隔たっている。魯般の雲梯<sup>(漆)</sup>を手に入れないと上

溪谷の底に在つて天地の如く隔たりたり。

ることが出来る手段もなく、壺公の竹杖<sup>(捌)</sup>を借りないと飛ぶことが出来る通力も

なく、あちらこちらに集まって、遙かに城を見上げて警戒していたばかりである。

---

## 注釈

※壺・官符……太政官から下される公文書。

※式・杓子峠……現兵庫県篠山市と猪名川町を結ぶ峠のことか。

※参・無根坂……現篠山市にある道のことと思われる。

※肆・八幡大菩薩……八幡の神。

※伍・左典厩……左馬寮とその頭の唐名。

※陸・暴虎馮河……四字熟語で無謀で命知らずの行動を取るという意味。

※漆・魯般の雲梯……魯般は中国春秋時代の人で、機械作りが巧みであり、雲梯という城攻めの道具を作った。

※捌・壺公の竹杖……壺公は中国説話の仙人。費長房という汝南の役人を青竹の杖で助けたとされる。

(参考文献：劉向葛 著・沢田瑞穂 訳『列山伝・神仙伝』1993年 平凡社)

---

もう保昌の敬語やだ……なんか謙譲語違和感ある……。

今回の保昌の発言で、どうやら頼光はよく体調を崩すような人物なのが伺えますね。そして、四天王の瑞夢と同様に再びお告げの夢を見て、127話の神託のことも相まって、頼光公の作中の神秘的な存在感が際立っています。

藤元元の筆がのっているのが訳をしていて伝わってくる話です。自画自賛ですが、「命知らずのことも、時によっては投げやるべきでない。」という訳は我ながら惚れ惚れするいい訳だと思っています……。

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL（月下庵/<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>）をご記載いただけましたらご自由にさせていただいて結構です。※※※



感想・指摘・叱咤激励、随時受け付けております。Twitter やメール等でご連絡ください m( )m

公開：2017/4/23

改訂：2021/3

海熊童子